

実習生の自尊感情とセルフ(自己) イメージとの関係について ～ 精神保健福祉現場実習前後からの検討 ～

大西 良・辻丸秀策・占部尊士・藤島法仁・鋤田みすず
大岡由佳・末崎政晃・津田史彦・福山裕夫

The influence of self-esteem and self-image which had student'sn Psychiatric Social Worker Training.

Ryo OHNISHI, Shusaku TSUJIMARU, Takashi URABE,
Norihito FUJISHIMA, Misuzu SUKITA, Yuka OOKA,
Masaaki SUEZAKI, Norihiko TSUDA, Hiroo FUKUYAMA

【抄録】本研究では、精神保健福祉現場実習前後での学生の自尊感情ならびにセルフ(自己)イメージの測定を行って、実習前後での変化と両者の関連性について明らかにして学生支援について考察することが目的であった。調査の結果、以下の4点を明らかにした。①学生の自尊感情は実習後に有意に低下すること、②2週間という短期間の実習ではセルフイメージに大きな変化はみられないこと、③実習後のセルフイメージについて因子分析を行ったところ、「リーダーシップの乏しさ」「消極的な自己開示」「情緒的配慮のなさ」の3つの因子が抽出されたこと、④自尊感情の低位群および中位群で「情緒的配慮のなさ」を強く感じていたことである。

これらの結果を踏まえて、考察では実習教育場面で自尊感情を維持・向上していくための学生支援の具体的方法について論じた。

【キーワード】精神保健福祉現場実習 自尊感情 セルフイメージ

1. はじめに

精神保健福祉現場実習の学習目標について「精神保健福祉士短期養成施設および精神保健福祉士一般養成施設等指定規則」では、以下のことがあげられている。

①現場体験を通して精神保健福祉士として必要な知識および技術ならびに関連知識の理解を深める。
②精神保健福祉士として必要な知識および関連知識を実際に活用し、精神障害者に対する相談援助およびリハビリテーションについて必要な資質・能力・技術を習得する。
③職業倫理を身につけ、援助者としての自覚に基づいた行動ができるようにする。
④具体的な体験や援助活動を専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養する。
⑤関連分野の専門職種との連携のあり方

を理解する。

また、荒田¹⁾は上記の目標を具体化したものとして、①精神障害者が置かれている現状を理解し、その生活上の実態や困難について把握するとともに、当事者のニーズを理解すること、②ケースワーク、グループワークなどの実際を通して、精神障害者に対する専門職としての援助関係のあり方や問題解決の基礎的な方法を学ぶこと、③機関・施設の役割と機能を学び、精神保健福祉士の業務および社会資源や他機関との連携のあり方を理解すること、④精神保健ボランティアやセルフ・ヘルプグループなどのサポートシステムについて理解すること、⑤専門職の倫理や人権擁護などの姿勢と、専門職のソーシャルワーク実践の能力を学び、当事者(精神障害者やその家族)とのふれ合いにより自己理解を深めて自己の課題を認識すること、などの5つを示している。

さらに、森²⁾は、①学内で学習したことの統合化、②専門職への接近、③対象者理解の深化の3つの目標をあげている。

このように、精神保健福祉現場実習では、精神障害者の生活上のニーズを把握することや他機関・他施設と連携を図り個別支援や集団・コミュニティに対する支援方法を学ぶことはもちろんのこと、専門職としての姿勢や心構えなどの専門職としての価値や態度を身に付け、自己理解を深めていくことが重要な学習目標となる。また、教育機関で学んできた精神保健福祉士としての知識・技術・価値などと現場での実体験との統合化を図るとともに、将来の専門家としての自己イメージを明確化していく意味もある。

このように精神保健福祉現場実習の目標設定をすると、精神科医療及び福祉を志す学生に対して、どのような精神保健福祉に関する知識を伝えることが効果的であるのか、またその知識が学生のなかにどのように根を下ろし、どのような「精神科医療」を想い描いているのかを検討することは、精神保健福祉養成教育の重要なテーマであるとともに、精神科医療の質の向上を図る上で根幹となる事柄であると考えられる。

著者らのこれまでの研究では、精神保健福祉現場実習への参加前後で学生が抱くセルフ（自己）イメージと実習ストレスとの関連を明らかにしたもの³⁾、精神保健福祉現場実習への参加前後で学生が抱く精神障害者イメージとセルフ（自己）イメージを比較して両者の違いを明らかにしたもの⁴⁾などがある。いずれの研究においても、セルフ（自己）イメージを明確に捉えることができ、イメージ形成には様々な要因、環境の影響を受けていることを示唆した。しかし、精神保健福祉現場実習参加前後でのセルフ（自己）イメージと自己満足感や自己効力感などの主観的自己評価を示す自尊感情との関連性を検討したものはまだなく、また先行の研究においてもこの視点からの報告は非常に少ない。

そこで今回、著者らは精神保健福祉士を志す学生を対象に実習前後でのセルフ（自己）イメージと自尊感情の両者の測定を行って、その関連性について明らかにすることが目的であった。

2. 対象と方法

1) 調査対象

本研究の対象者は、福岡県と佐賀県にある4年制大学精神保健福祉士養成課程と精神保健福祉士短期養成施設（1年間養成）の学生、全45名であった。その内訳は、福岡県のA大学の学生17名、佐賀県のB大学の学生15名、短期養成施設の学生23名である。男女の割合は、男性15名（33.3%）、女性30名（66.6%）である。

この45名は養成課程やカリキュラムなどに若干の違いはあるものの、将来、精神保健福祉士の国家資格を取得して精神科病院および精神障害者の社会復帰施設などの精神保健福祉分野への就職を希望しているという共通の目標を持っている。

2) 調査時期

2005年5月～11月にかけて、学生の実習時期に合わせて調査を実施した。

3) 調査の内容と手続き

本研究では、以下の2つの質問紙を用いて測定を行った。

(1) 学生の自尊感情の測定について

自尊感情を測定する尺度としてRosenberg, M.⁵⁾によって作成され、山本ら⁶⁾によって邦訳された「自尊感情尺度」を使用した。この尺度の特徴は、「少なくとも人並みには価値のある人間である」「自分には自慢できるところがあまりない」「自分は役に立たない全くだめな人間だと思うことがある」など、自己満足感や自己肯定感などの自己評価が可能である。また、この尺度を用いることの利点として、質問項目数が10項目と少なく実施が容易である上、1因子の下位尺度で構成されているために、単純に加算することで、自尊感情の高低の判定が比較的容易に可能である。さらに、この尺度の信頼性の高さについては、多くの先行研究で確認がなされている⁷⁾⁸⁾⁹⁾。

配点方法は、「あてはまる」を5点、「ややあてはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点、「ややあてはまらない」を2点、「あてはまらない」を1点と配点を行った。ただし、逆転項目については、

5点を1点，4点を2点，3点はそのまま，2点を4点，1点を5点に換算した。評定方法は10項目を単純加算することで採点した。したがって得点は10点から50点の間で分布する。

(2) 学生のセルフ（自己）イメージの測定について
学生の抱く自己イメージを測定するものとして、Semantic Differential Method（以下SD法）を用いた。SD法は、Osgood, C.E.¹⁰⁾が最初に理論構成を行ったもので、もともとは、言語の意味の測定法として開発されたものである。現在、人が色彩、音楽、絵画、商品、人物など広い範囲にわたる事象に対して抱く意味、あるいはそのイメージを測定する方法として利用されている。本調査では大石¹¹⁾や井上¹²⁾が心理学や教育学の分野で用い、パーソナリティの測定に有効であるとする形容詞対49項目の中から使用頻度の高い30項目の形容詞対を設定した。具体的には、「明るい-暗い」「細やかな-雑な」「決断力のある-決断力のない」「活発な-不活発な」「たくましい-弱々しい」などの比較的即答しやすい形容詞対の組み合わせである。

評定方法は30項目の質問ごとに5段階の尺度（「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」の両極回答）のうち、いずれかの回答を選択させる。評定尺度の配点は、「どちらともいえない」の0点を中心に置き-2～2点までの配点を行った。したがって、得点が正の数であれば右側の形容詞が当てはまり、得点が負の数であれば左側の形容詞が当てはまることになる。

調査の手続きとしては、実習オリエンテーション（事前説明）の段階で、本調査の目的、実施方法について説明を行った上で、学生の実習開始時期および終了時期に合わせて質問紙を配布してその場で回収を行った。

4) 統計学的解析法

自尊感情とセルフ（自己）イメージの各項目の実習前後での変化をみるために、対応のあるサンプルのt検定を行った。また、セルフ（自己）イメージの因子抽出を行うために、主因子法による因子分析を用いた。抽出された因子については、Cronbachの α 係数を用いて内的一貫信頼性を算出した。さら

に、実習後での自尊感情得点とセルフイメージとの関連性を明らかにするために、自尊感情得点を低位群、中位群、高位群の3群に分け、それぞれを独立変数として、セルフイメージの因子を従属変数とする分散分析を用いた。また、その際に有意差の認められたものについては、TukeyのHSD法による多重比較を行って、群間の違いを検討した。また、いずれの統計学的解析においても、5%以下の危険率を有意差とした。

なお、以上の集計および解析では、Microsoft Excel 2003, Windows for SPSS 11.0Jの統計ソフトを用いた。

5) 倫理的配慮

調査対象者に対して、調査への協力依頼文書の中で、精神保健福祉現場実習をより効果的に行えるための調査である旨を記載した。さらに、本調査はあくまでも任意であり、成績や実習評価とは一切関係のないこと、回答結果はコンピュータ処理され、個人の回答が外部に知らされることはなく、結果は学術的な目的以外には使用しないことを明記した。

また、調査対象者それぞれ個別に調査結果をフィードバックして、実習後での自己評価や振り返りなどの自己学習の一指標として役立ててもらった。

6) 用語の定義

なお、「自尊感情」については、さまざまな研究者によって定義が若干異なるが、本研究では、本調査で使用した質問紙を開発したRosenberg, M.¹³⁾が用いている定義を用いることにする。その定義とは、「自尊感情とは、人が自分自身についてどのように感じているのかという感じとり方や自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚のこと」である。つまり、自尊感情が高いということは、自己肯定、自己満足、自己尊敬を意味し、逆に自尊感情が低いということは、自己否定、自己不満足、自己軽蔑を意味することになる。

3. 結果

1) 自尊感情得点の前後変化について

自尊感情尺度の各項目の平均値と標準偏差を示し

Table.1 自尊感情得点の平均と標準偏差

		実 習 前		実 習 後	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	少なくとも人並みには、価値のある人間である	3.82	1.19	3.64	0.96
2	色々な良い素質をもっている	3.60	1.07	3.40	0.96
3	敗北者だと思ふことがよくある	3.13	1.24	2.71	1.20
4	物事を人並みには、うまくやれる	3.64	0.98	3.38	1.05
5	自分には、自慢できるところがあまりない	3.02	1.22	2.96	1.09
6	自分に対して肯定的である	3.20	1.16	2.89	1.07
7	だいたいにおいて、自分に満足している	2.80	1.16	2.69	1.16
8	もっと自分自身を尊敬できるようになりたい	4.04	0.88	4.18	0.98
9	自分は役に立たない全くだめな人間だと思ふことがある	3.27	1.25	3.11	1.28
10	何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思ふ	2.67	1.26	2.58	1.34
合 計		33.19	3.10	31.54	4.01

t(44)=2.32 p<.05

たものが Table.1 である。この自尊感情尺度の10項目を単純加算した結果、実習前の平均値は33.20±3.10、実習後の平均値は31.53±4.02であった。実習前後での総合得点の平均値の差の検定(対応のあるサンプルのt検定)を行ったところ、実習後に有意に低下することが明らかとなった(t(44)=2.33 p<.05)。

2) セルフィメージの前後変化について

セルフィメージの30項目について実習前後で測定した結果を Fig.1 に示す。全体的な傾向は、実習前と後ともに正の数に偏っており、否定的な内容のイメージであることがわかる。実習前で平均が0.5以上であった項目は、「活発な-不活発な」(M=0.58)「親切な-不親切な」(M=0.82)「真面目な-不真面目な」(M=0.64)「のんびりした-てきぱきした」(M=0.78)「おおらかな-気持ちの細やかな」(M=0.80)「誠実な-不誠実な」(M=0.56)「楽観的な-悲観的な」(M=0.62)「明るい-暗い」(M=0.71)「積極的な-消極的な」(M=0.56)の9項目であった。その一方で、平均値が-0.5以上の項目は、「強い-弱い」(M=-0.51)の1項目であった。

つぎに、実習後で平均値が0.5以上であった項目は、「活発な-不活発な」(M=0.91)「親切な-不親切な」(M=1.13)「真面目な-不真面目な」(M=0.76)「のんびりした-てきぱきした」(M=0.60)「誠実な-不誠実な」(M=0.87)「楽観的な-悲観的な」(M=0.58)「温かい-冷たい」

(M=0.69)「意思強固な-意志薄弱な」(M=0.78)「社交的な-非社交的な」(M=0.73)「慎重な-軽率な」(M=0.82)「明るい-暗い」(M=1.00)「積極的な-消極的な」(M=0.62)の12項目であった。その一方で、平均値が-0.5以上の項目はみられなかった。

以上のことから、学生は実習前後ともに否定的な内容のセルフィメージを抱えていることがわかった。

つぎに、実習前後でのセルフィメージの平均値の差の検定を行ったところ、すべての項目で有意な差はなく、実習前後で変化することは認められなかった。

つまり、実習によってセルフィメージの変化はみられないことがわかった。

3) 実習後のセルフィメージの因子分析結果

実習後のセルフィメージ30項目について、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。その結果、スクリー基準に基づいた固有値の変化および解釈可能性から3因子解が適当であると判断して採用した。最終的には、0.45以上の因子負荷量を持つ3因子25項目を抽出した。また、採用された各因子の信頼性を確認するために、クロンバックの内的整合性の信頼係数(α 係数)を求めたところ、 $\alpha = 0.88 \sim 0.75$ と高い信頼性が確認された。また、この3因子解の累積寄与率は46.66%であった。

各因子の内訳は、第1因子11項目、第2因子7項目、第3因子7項目である。その内容は、Table.2 に示す。第1因子は、因子負荷量の極性に依りて高

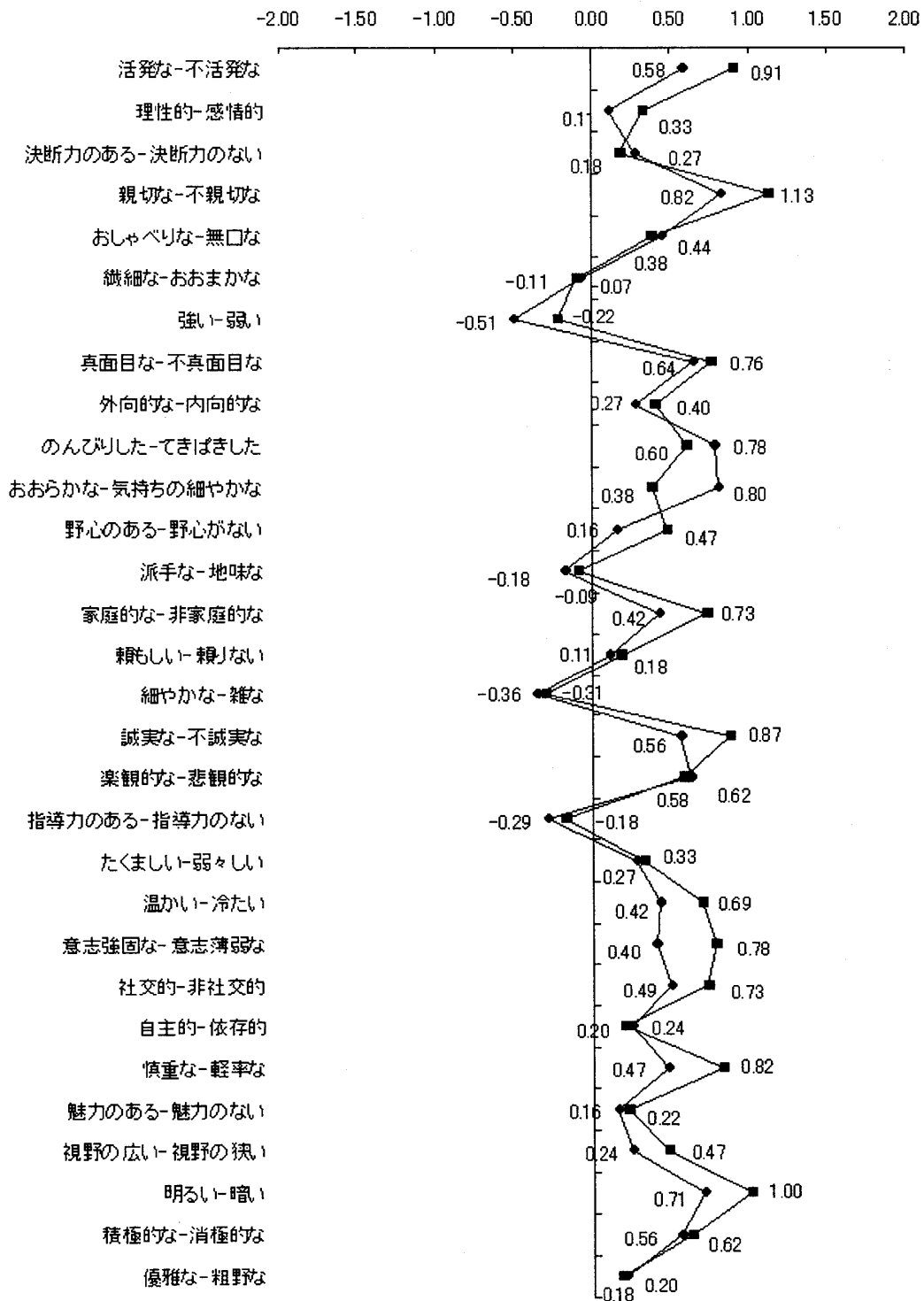


Fig. 1 実習前後でのセルフ・イメージの変化について

い順に「弱々しい」「弱い」「頼みない」「決断力のない」「消極的な」「のんびりした」「地味な」「指導力のない」「視野の狭い」「魅力のない」「不真面目

な」の以上11項目からなり、これを『リーダーシップの乏しさ』因子と命名した。第2因子は、因子負荷量の極性に応じて高い順に「内向的な」「不活発

Table. 2 実習後でのセルフイメージの因子分析結果

	リーダーシップの乏しさ	消極的な自己開示	情緒的配慮のなさ	共通性
たくましい-弱々しい	0.82	0.12	0.05	0.66
強い-弱い	0.71	-0.05	-0.33	0.35
頼もしい-頼りない	0.71	0.25	0.38	0.54
決断力のある-決断力のない	0.69	0.17	0.16	0.54
積極的な-消極的な	0.66	0.56	0.02	0.69
のんびりした-てきぱきした	-0.56	0.17	0.03	0.54
派手な-地味な	0.53	0.23	0.07	0.61
指導力のある-指導力のない	0.51	0.30	-0.01	0.34
視野の広い-視野の狭い	0.51	0.39	0.43	0.77
魅力のある-魅力のない	0.50	0.45	0.15	0.34
真面目な-不真面目な	0.46	0.20	0.29	0.37
楽観的な-悲観的な	0.27	0.23	-0.25	0.15
外向的な-内向的な	0.26	0.81	-0.22	0.34
活発な-不活発な	0.41	0.70	-0.10	0.33
社交的-非社交的	0.06	0.69	0.04	0.71
明るい-暗い	0.47	0.61	0.14	0.68
親切的な-不親切的な	-0.11	0.53	0.49	0.54
自主的-依存的	0.42	0.53	0.05	0.75
おしゃべりな-無口な	0.25	0.48	0.18	0.36
意志強固な-意志薄弱な	0.12	0.30	0.22	0.32
おおらかな-気持ちの細やかな	-0.03	0.26	0.04	0.07
細やかな-雑な	0.15	-0.03	0.81	0.47
慎重な-軽率な	-0.11	0.22	0.71	0.49
繊細な-おおまかな	-0.13	-0.17	0.70	0.46
温かい-冷たい	-0.02	0.24	0.64	0.56
誠実な-不誠実な	0.28	0.24	0.63	0.47
家庭的な-非家庭的な	0.21	-0.03	0.54	0.60
理性的-感情的	0.08	0.31	0.49	0.61
優雅な-粗野な	0.26	0.36	0.42	0.19
野心のある-野心がない	-0.01	0.16	-0.38	0.17
寄与率 (%)	17.33	14.77	14.56	
累積寄与率 (%)	17.33	32.1	46.66	

な」「非社交的な」「暗い」「不親切的な」「依存的な」「無口な」の以上7項目からなり、これを『消極的な自己開示』因子と命名した。第3因子は、因子負荷量の極性に応じて高い順に「雑な」「軽率な」「おおまかな」「冷たい」「不誠実な」「非家庭的な」「感情的」の以上7項目からなり、『情緒的配慮のなさ』因子と命名した。

4) 実習後での自尊感情得点とセルフイメージ因子との関連性について

自尊感情得点を3群(低位群・中位群・高位群)に分け、この3群とセルフイメージの3因子(「リーダーシップの乏しさ」「消極的な自己開示」「情緒的配慮のなさ」)との関連性を検討した。なお、自尊

感情の群分けは、分布の正規性を検討した上で平均を軸とした分割をした。その結果、22~29点を低位群(24.4%)、30~33点を中位群(48.9%)、34~41点を高位群(26.7%)に分けられた。

自尊感情の3群とセルフイメージとの関連性について図に示したものがFig. 2である。自尊感情と「消極的な自己開示」との間に有意差がみられ($F(2,41)=3.34$ $p<.05$)、その後のTukeyのHSD法による多重比較の結果、自尊感情の低位群および中位群の学生は、高位群の学生に比べて、「消極的な自己開示」イメージを抱く傾向にあることが示された。つまり、自己満足感や自己効力感の乏しい学生で自己開示できていない傾向にあるといえる。

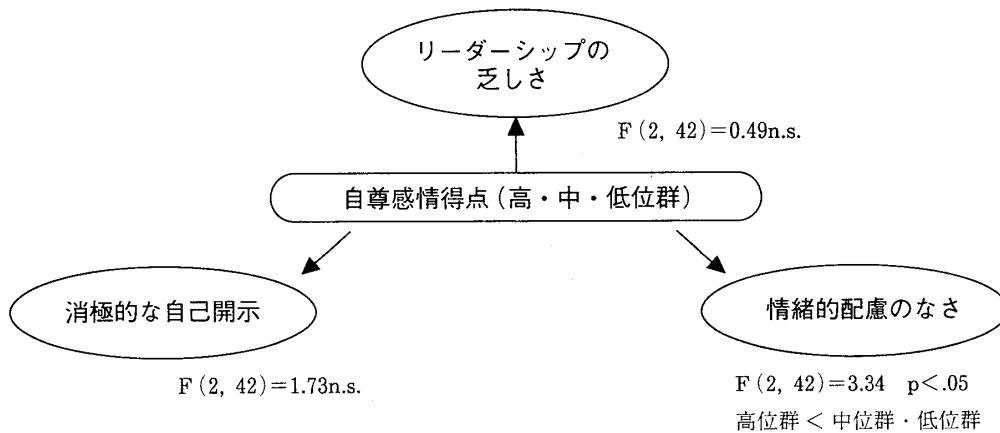


Fig. 2 自尊感情とセルフイメージ因子との関連分析の結果

4. 考察

1) 自尊感情の実習前後での変化について

本研究では、学生の実習前後での自尊感情が、実習後に有意に低下することが示された。梶谷ら¹⁴⁾は、看護実習生の実習前後で自尊感情を測定して学生の心理的状況との関連を明らかにした結果、自尊感情低位群、高位群ともに学生は過緊張、不安や不適応感、自己洞察不足などの状態にあることを明らかにしている。また、佐藤ら¹⁵⁾は看護実習における学生の自尊感情と気分の落ち込みとの間に相関がみられ、気分の落ち込みがみられる学生で自尊感情は低くなることを明らかにしている。著者らの研究¹⁶⁾においても、実習後での気分状態、特に自尊感情の高い学生の活気は高まっていたが、自尊感情低位群では活力の低下がみられた。このことは、自尊感情、言い換えれば自己肯定感や自己満足感の上昇に伴って、肯定的な気分も上昇するものと考えられる。自尊感情が極度の低い状態は自己不全感を高め、ドロップアウトをする可能性が考えられる。また、自尊感情の低下は専門職としてのアイデンティティの確立を阻害することも考えられる。そのため、実習後の事後指導の場面で自己肯定感や自己満足感などの自尊心を回復あるいは高めることができるような学習環境が必要であると考えられる。

2) 実習前後でのセルフイメージの特徴

本研究では、精神保健福祉現場実習を通して学生の抱くセルフイメージについて測定を行い、実習前

と後でのセルフイメージの特徴を明らかにした。具体的には、実習前後ともに否定的な内容のイメージであったこと、実習前に比べて実習後に否定的なセルフイメージを抱く傾向にあることが分かった。

また、実習後でのセルフイメージは、「リーダーシップの乏しさ」「消極的な自己開示」「情緒的配慮のなさ」の3因子が抽出された。精神保健福祉現場実習に臨む学生には、誠実で積極的な態度が求められ、さらに4週間から6週間という長期にわたる実習であるため心身ともに一定程度の強さが必要である。また、それらと同時に指導者、実習機関の中での人間関係作りにおいて、言葉づかい、行動、情報共有などについてより慎重な態度で臨まなければならない。本調査で得られた3因子はいずれも一般に精神保健福祉現場実習において学生に求められる資質をあらわしたものと見える。つまり、このことは学生自身が現場から求められる実習生像を意識できていることが分かる。その理由として、本調査の対象者が大学3年次に社会福祉現場実習を履修し種々の社会福祉施設や福祉行政機関などで2週間から4週間の現場実習を体験していることから、実習に求められる学生としての姿勢や態度などの資質を理解しているためであると考えられる。さらに、学生のうち年齢の高い者については一定程度の社会経験を有していると思われ、その経験が自己イメージの形成に影響を与えているとも考えられる。

3) 自尊感情を維持するための具体的取り組みについて

Table.3 実習中のソーシャルサポートの分類について

	インフォーマル	フォーマル
形のあるもの	家族 友人 先輩 同級生 ・	現場指導者 大学教員 病院スタッフ スーパーバイザー ・
形のないもの	励まし 関心 安心 満足感 ・	責任 ネットワーク 情報共有 ・

先述したように、実習生の自尊感情は実習後に低下することが明らかになった。実習場面において自尊感情の低下はクライアント-学生の関係成立過程と関係があり、健康的でない自尊感情群では、クライアント-学生関係に不安、葛藤、混乱、防衛などが起こりやすい¹⁷⁾とされている。このような、自尊感情の低下を防ぐ方法として、広¹⁸⁾は、教員や現場指導者へ失敗や努力の成果を報告できるような、頼ることのできる存在が必要であると述べている。著者らの実習指導の経験からも、実習生の自尊感情を健康的に保ちつつ、実習を行っていくためには教員や現場指導者などのソーシャルサポートが必要であると考えられる。しかしながら、ソーシャルサポートは目に見えるような形あるものだけではない。実際に学生が必要とするのは、Table.3に示すような「形のないソーシャルサポート」を求めているように感じる。具体的には、インフォーマルな形のないサポートとして、「励まし」、「関心」、「安心」、「満足感」など、フォーマルな形のないサポートとして、「責任」、「ネットワーク」、「情報共有」などがあげられよう。これらは、一見してつかみどころのない不透明なサポートであるが、実習生の自尊感情の保持に有効なものであると考えられる。そのため、これら形のないサポートを意識した実習指導が求められるのではないだろうか。今後さらに、これらのサポートの効果を検証していく必要がある。

5. まとめ

本研究は、精神保健福祉現場実習前後での学生の

自尊感情ならびにセルフ（自己）イメージの測定を行い、実習前後での変化と両者の関連性について明らかにすることが目的であった。調査の結果、①学生の自尊感情は実習後に有意に低下すること、②2週間という短期間の実習ではセルフイメージに大きな変化はみられないこと、③実習後のセルフイメージについて因子分析を行ったところ、「リーダーシップの乏しさ」「消極的な自己開示」「情緒的配慮のなさ」の3つの因子が抽出されたこと、④自尊感情の低位群および中位群で「情緒的配慮のなさ」を強く感じていたことを明らかにした。

この結果を踏まえて、学生の自尊感情を保持する方法として、形のないソーシャルサポートを用いることの有効性について示唆した。

参考文献

- 1) 荒田寛：「精神保健福祉援助実習」への期待と今後の検討課題。精神保健福祉，2001；第32巻第1号（通巻45号）：9-12。
- 2) 森法房：基礎実習の展開と課題～動機づけの強化と問題意識の醸成～。山口県立大学社会福祉学部紀要，2000；第6号：11-20。
- 3) 大西良，辻丸秀策，大岡由佳，鋤田みすず，福山裕夫：精神保健福祉現場実習における自己イメージの構造とその影響要因。久留米大学文学部紀要社会福祉学科編，2006；第6号：67-75。
- 4) 大西良，辻丸秀策，大岡由佳，鋤田みすず，福山裕夫：精神保健福祉現場実習における精神障害者イメージとストレス感情との関連性。久留米大

- 学文学部心理学科・大学院心理学研究科紀要，
2006；第5号：163-169.
- 5) Rosenberg, M. : Society and the adolescent self-image. Princeton Univ Press, 1956.
- 6) 山本真理子, 松井豊, 山城由紀子：認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, 2001；第30号：64-68.
- 7) 遠藤辰雄, 井上祥治, 蘭千壽編著：セルフ・エスティームの心理学～自己価値の探求. ナカニシヤ出版, 1992；116-124.
- 8) 井上祥治：セルフ・エスティームの測定法とその応用～セルフ・エスティームの心理学・自己価値の探求. ナカニシヤ出版；1992：57-61.
- 9) 前掲書 6)
- 10) Osgood, C, E and et ai.: The Measurement of Meaning Univ. of Illinois Press. Urbana, 1957.
- 11) 大石勝代：大学生，中学生および精神分裂病者における意味構造の比較. 心理学研究, 1974；第45巻第1号：21-31.
- 12) 井上正明, 小林利宣：評価技法としてのSD法の意義とその用い方（その2）～形容詞対の尺度構成の方法～. 指導と評価, 1985；第31巻第10号.
- 13) 前掲書 10)
- 14) 梶谷桂子, 村上明美, 志水奈保子, 三輪昌子：臨床実習における患者—学生関係と学生の自尊感情の関連. 神戸市立看護短期大学紀要, 1996；第15号：133-142.
- 15) 佐藤晴子, 古賀靖之, 水田茂久：看護学生の臨床実習に対する自己効力感尺度の作成と活用に関する一考察. 西九州大学紀要九州社会福祉研究, 2003；第26号：83-92.
- 16) 大西良, 藤島法仁, 占部尊士, 津田史彦, 鋤田みすず：精神保健福祉現場実習における学生の気分状態と自尊感情変化との関連について. 久留米大学大学院比較文化研究論集, 2006；第20号.
- 17) 小野幸子：自尊感情の低い学生の臨床実習指導～Self-Esteem スケールを用いて～, 筑波大学医療技術短期大学部研究報告. 1990；第11号：31.
- 18) 広房子：看護学生の自尊感情に関する研究～自尊感情と望ましい看護婦の態度を支える内的要因との関係～, 日本看護学会第22回抄録集. 1991：200.
-